

多彩な技術分野でニーズに沿ったITソリューションを提供 人材基盤を固め、独自の製品化も視野に邁進中

株式会社ウェーブ(本社:東京都千代田区)は設立から36年、半導体設計、業務アプリケーション、インフラ設計構築、組込み開発といった多彩な分野の受託開発を主業務とする。ここ数年は人材の採用、育成に注力し、各事業のさらなる強化に加え、幅広い技術分野の経験を活かした独自の製品開発を視野に飛躍を目指す。そんな同社を訪ね、代表取締役・岩橋真美氏に近況をお伺いした。



代表取締役 岩橋 真美氏

就任後、社員増員に着手。 3年で40名を採用

ウェーブは受託開発を核として成長を続ける技術企業。その成長の糧は人材基盤にあるといえる。設立から36年、アナログ回路・アナログデザイン設計を得意とする半導体設計、証券会社など金融分野の基幹系システムの開発実績が豊富な業務アプリケーション開発、ネットワークサーバー設計やシステムの導入支援、運用サポートに対応するインフラ系システムの設計構築、そして各種デバイスドライバ開発やファームウェア開発を軸とする組込み開発の4つの事業を柱に展開してきた。代表取締役の岩橋真美氏は「売上割合は各事業がほぼ同じになっています」と説明する。

それぞれの技術者は、客先に常駐し開発業務に携わる。組込み開発は18年前に立ち上げた。「わずか2名の技術者でスタートしました。いま技術者は新人2名を含め15名になっています。ベテランの人が多くて、得意とする開発はハード寄りの分野です。市場的には音響系、車載系の実績もあります。常駐先では、進行中の開発が終わればそのまま次の開発に着手する

という感じで、社員のように業務を遂行しています」

岩橋氏は代表となって4年目。就任後、着手したひとつは社員の増員だ。「各事業部門をしっかりとひとつひとつの事業部門として立ち上げていこうと計画を立てました」。現在の社員数は80名だが、この3年で中途社員を中心に40名を採用。半数の20名はこの1年で採用した社員だという。人材採用、育成は会員企業の多くが頭を悩ませている課題で、その手法が気になるところだろうが、その解は「社員による紹介」

「求人媒体を活用することもありましたが、ほとんど反応がなく、入社しても早々に辞めてしまう傾向がありました。そこで入社したいという人、モノづくりに興味がある人を社員自身が誘う紹介制を設けました。社員みなさんの協力があって進められています。なかには、まったくスキルのない人もいますが、イチから教えていくことで頑張っって追い付いてきてくれます」

スキルチェンジを希望してくる人もいます。「半導体の開発の経験者で組込み技術を学びたい、ほかの会社を受けたものな

かなか採用が決まらないという人などもあります。スキルは優秀なので、改めて技術を学んでいってもらいます」

育成に工夫、“農業”も研修の場に

外国人の採用も積極的で、昨年入社組の5名はベトナム、韓国、ミャンマー出身の外国人。「日本人だけだとどうしても回せなくなるという危機意識があり、数年前から日本語学校の方と連携する機会が得られ採用のルートを築いています」。そのうちの1名が組込み開発事業に配属されている。「将来的にはその技術を持って自国を発展させたいという強い思いがありました。アプリケーションやネットワーク系の知識のみでしたが、いまC言語に対応してもらっています」

こうして4つの事業をバランス良く成長させていくことを目標とするが、岩橋氏は特に半導体や組込み開発には難易度の高さを感じるという。「いろいろなシチュエーションでの経験が必要なので、最初のハードルが非常に高いと感じています。実際、自分の技術では付いていけないと諦めてしまう人もいますが、逆に言えば



▲新潟の農家から借り受けた田圃で田植えに精を出す社員。田を起こし田植え、稲刈り、そしてお米をつくるまで実際に体験し、農家の役に立つITソリューションの提供を目指す。

組込み開発メンバーではジャイロ、光、超音波など多彩なセンサーを搭載した自律型ロボットを試作するなど、自社開発に取り組んでいる。

張っているつもりでも社内だけではハードルの高さを感じてしまいます。そういう判断にも通じるような、新しい技術を学ぶきっかけになればうれしく思います」

ベースの部分をしっかり勉強していれば、あとは経験を積ませていただけなので、吸収力が高ければ経験の少ない若い人でも良いと思っています」

育成しながら実務をこなすという面もあり技術教育も重要だが、週1回自社に集まり勉強会の場を設けているそうだ。また、社員で始めた農業も格好の研修の場となっている。「新しいものに携わり、それぞれ半田ごてを使うようなところから体験してもらい、少しずつテクニックのある技術にふれてもらいながら着実に育成を進めています。農業向けに新しいモノをつくるということも研修のひとつになっています」

社員で取り組んでいる農業は岩橋氏の発案で始めた。独自のITソリューションの提供を目指す領域として選択したものだ。「もともとは福利厚生のひとつという発想もありましたが、4つの事業で培った技術力で何か製品化できないかと考えていて、友人のツテで縁あって新潟の農家から田圃をお借りできた。農家と直接ふれ合って、自分たちがどんなところで役立てるか経験させたいとの思いからでした。実際に田植えから稲刈りまで経験して、でき上がったお米はみんなであげられています。製品化はこれからですが、アイデアはたくさん出てきています」

組込みの“いま”を知るべくJASAへ

こうして、採用と育成を続けながら独自の製品開発をも見据えるが、JASAへの入会もそうした体制の基盤構築に活かせる場と考えた。岩橋氏は「私自身この業界で10年になりますがエンジニアではありません。組込み技術がいまどこまで進んでいるのか、常に生の声が聞ける環境が望ましいと思いました。いまフォーカスしている農業分野への応用はもちろんですが、AIの技術をIoTに取り入れて行きたいという思いがあり、そうした知識、技術力を高めていければと考えています。また請負の仕事に依頼されることもありますが、自社だけでは対応できないときなど協力いただける会社との人脈づくりができればという思いもきっかけのひとつです」と説明する。デバイスの開発やIoT構築に重要となる技術テーマのワーキンググループにも関心があり、メンバーとしての活動も期待される。

また岩橋氏は、社員教育に活かせる技術情報を得る機会となることも望んでいる。「何をどう教えていくか、組込み事業の担当者とのディスカッションしながら進めていますが、若手にはどの技術を身に付けてもらうか、ミドル層なら次は何を覚えてもらえばいいか判断が悩ましく、常にアンテナを

社員の力を結集し飛躍を目指す

80名にまでなった社員数は「まだまだ増やす気持ちでいます」という。ISMS (ISO27001)の取得・更新も行えた。さらなる飛躍が期待されるが、今後は“持続”と“トライ”がテーマになりそうだ。「どんなに自動化が進んでも、環境や技術を含め全体像が把握できていないとまわりで起こることも想定できないので、これまで組込み開発で蓄積してきたデバイス技術は持ち続けたい。ただその点に執着せず、AI、IoTをキーワードに、関連する技術を身に付ける人材を育てていきたいと考えています。」

画像処理技術や無線技術、基板設計、LSIとたくさんのお客様のなかで経験を積み重ねた社員は各自がプロフェッショナル。それぞれを掛け合わせたらどんなものができるかまだ未知数で、農業での試みを足掛かりにして笑顔になってもらえるものをつくらうと話しています」

“トライ”と掛けるわけではないが、なにやらラグビーW杯をきっかけに生まれ流行語にもなった『ONE TEAM(ワンチーム)』という言葉がマッチするような印象だ。きつと笑わない男をも笑顔にする製品が生まれるに違いない。

●「会社訪問」のコーナーでは、掲載を希望される会員企業を募集しています。お気軽にJASAまでお問い合わせください。